

随筆・評論

竹中圭子
藤本弘子
山口一選

特選

叔父の遺したもの

平田町
伊藤眞雄

今から六十年程前のこと。私が小学校六年生の頃に生家の裏手にあった、大きな蔵に入ったときの記憶が今も鮮明に蘇ってくる。分厚い頑丈な扉を力を込めて右へゆつくりと開けると、中は薄暗く、冷気が漂ってくる。二階の狭い格子戸から差し込む光を頼りに中を見ると、幾つかのタンスや長持ちが所狭しと置かれている。入り口のすぐ右側の勾配の急な、狭い梯子段を一歩ずつ上がっていく。階段を上りつめたすぐ左手に両手を広げたくらいの木箱が目に入る。蓋を持ち上げて、中を見ると、多くのノートが束ねてある。ど

れも黄ばんでおり、一番上の一冊を開ける。黒インクの文字がビッシリと並び、何が書かれているのか分からないが、私はそこに現れた文字の美しさに惹きつけられた。ページ全体が整っているのである。ページをめくると所々に定規で引かれた図形のようなものもある。それを閉じ、他のノートにも目を通すが、どれも同じく丁寧に書かれた文字が飛び込んでくる。

その夜、私はそのノートのことを父に話した。父は、「それらは、お父さんの弟が勉強に使っていたものだよ」と誇らしげに言った。

さらに、二十年前のこと。父は亡くなる前に家族のことを一冊のノートに残していた。私は『父の手記』と題し、家族や親戚に配った。その中に、叔父のことが書かれている。「私が六歳、弟が三歳の時であった。弟は突然倒れて手足を震わせ、身体を動かすことができなくなった。近くの薬局の方が、京都大学付

属病院を紹介してくれた。父はそこへ弟を連れて行くと、医師から『小児麻痺』と診断され、完全に治ることは難しいと言われた。父母は藁をもつかむ思いで、神仏にすがった。地元の宗教家の指示に従って家の井戸を清め、母は雨の日も雪の日でも朝晩二回、近くの神社でお参りを続けた。

一年後、弟の病気は回復し、元通りの元気な身体になった。家族で涙ながらに喜んだ。その後、弟は大垣第二工業高校を卒業し、上野原電力区に勤務した。適齢検査甲種合格後、戦車隊兵として九州久留米隊に入隊したものの、最後はサイパンで戦死した」

また父は、別の所で次のように記している。「父は弟が陸軍中尉で名誉の死を遂げ、三歳の時の大病が治癒でき、立派にお国の役に立ったとはいえ、帰らぬ人となったことで隠せぬ寂しさを味わっているようでした」

私はその叔父に会いたかった。あのノートのこと、病気の奇跡的な治癒のこと、いろいろな話を聞きたかった。叔父がなぜサイパンで死ななければならなかったのか、そのことを調べずにはいられなかった。

太平洋戦争は一九四一年十二月八日、日本の真珠湾攻撃で始まった。その後、日本は南へと侵攻したものの、次々と壊滅させられた。一九四四年六月、日本はマリアナ諸島での

攻防戦で大打撃を受けた。米軍はその勢いでサイパンに侵攻。六月半ばに米軍は上陸し、七月七日、必死の抵抗を続けていた日本兵の約三千人が最後の総攻撃の末に「玉砕」した。

七月九日、サイパンは米軍に占領され、最北端のマツピ岬に追いつめられた兵士や民間人は「天皇陛下、万歳」と叫び、次から次へと身を投げたという。現在、「バンザイ・クリフ」と呼ばれ、有名な観光地となっている。このサイパン島での死闘で、日本軍の約四万一千人、島の民間住民の約一万人、さらに先住民の約千人が命を落とすとある。

当時、「死して罪過の汚名を残すことなかれ」という戦時訓が日本兵の誰にも植え付けられ、投降し捕虜としての生きる道は閉ざされていた。また、「玉砕」は当時の大本営が造った言葉で、そこには潔さや自己陶醉だけがあり、戦死をも美化していたのだ。

叔父の死後、今年で八十年が過ぎる。

故郷の墓地には、先祖代々の墓の隣に、叔父の名前と「陸軍中尉・昭和十九年七月十八日サイパン島にて玉砕」と銘打った墓がある。だが、そこに叔父の遺骨はない。今もサイパンでひっそりと埋もれているのだろう。

先日、生家に住む兄に電話し、蔵や叔父のノートのことを尋ねた。「蔵は解体し、中にあった物はすべて処分した」と言う。私は、

何か寂しさを感じずにはいらなかった。

生家の仏間には叔父の遺影が掲げられている。叔父の姿は若々しく、軍服姿であるためか凛々しい。それでいて、微笑んでいる。

世界では多くの若い兵士をはじめ、民間人が戦争の犠牲になっている。戦争は家族をはじめ、多くの悲しみをもたらすだけである。

私は叔父が遺したものを忘れず、ここに一つの記録とする。これを後世に伝えていくことが、私の今の使命であると思っている。

(評)

亡き父の手記に綴られた、サイパンで戦死を遂げたという叔父の生涯に触れ「会って話したかった」という作者の叔父への深い敬愛と哀悼の想いを軸に、時代の流れとともに風化されつつある戦争の悲惨さを世に伝え残したいと願う作者の思いが伝わる力作。

入選

郷愁

大 藪 町
柳 瀬 宏 子

一枚の古い写真がある。父方の祖母とその妹である母方の祖母を中心にした血縁者の集合写真で、父方の祖父は、黒船来襲に四年先

立つ嘉永二年の生まれで、既に他界。若き日の父と母の姿もある。

私はその写真が撮られた、母の姉の家の敷地内で、五人姉姉の末っ子として終戦の翌年に生まれた。長兄とは十九才離れ、すぐ上の兄とは十才違い。従兄弟達は叔父叔母のような年齢で、私は大人の中で育ったと言える。ここでは三才近くまで過ごした。

自分と言う者を意識し始めたのは、五才の頃だったろう。母に詰めてもらった誕生祝いの赤飯を片手に、もう片方の脇にくると巻いた筵を抱えて、移り住んだ市営住宅の前に広がる原っぱに向かって歩いて行った。

広大な原っぱとその向こうに広がる海に、一抹の不安を抱いたか、家の方に向かって膝頭をきつちり揃え赤飯を食べた。ただそれだけの事だったが、振り返れば、それが人生への船出の儀式だったように思う。この戦後の急増えの市営住宅には、種々雑多な職業の人々が風に吹き寄せられるように住みついた。

漁師の一人は小柄な好好爺で、友達と私の首を掬い上げる様に持ち上げ「東京見えたか。」と言って、幼い私達をゲラゲラ笑わせた。東京は愛媛の小さな町に住む人々にとつて遙か遠い場所で、憧れと怖れをもって語られた。テレビはまだ無く大人達はラジオや新聞

を情報源とし、子供達は漫画や雑誌に夢中だった。

貸本と駄菓子屋のおじさんは、商品を並べた一畳きりの板間の端に座り、口をへの字に曲げ、目だけはギョロリと下に向け、子供達がズルをしないかとしつかり見張っていた。

斜め裏のおじさんは、豆を炊いて行商に出ている。台所の板間にはボウルに真つ白な砂糖が山のように盛り上げてあった。当時サツカリンが安価な甘味料として使われていた中で、その白さが眩しかった。

住民の中には中学校の教師や娘と同じ小学校に勤める教頭先生もいた。ある日その小学校で、虱対策として新一年生の私達の頭に農薬のDDTが吹きかけられた。皆の頭は白い粉だらけになったが、女の先生は同級生の彼女の頭には、少ししか吹きかけなかった。

銀行勤めの父の許に、住民のおばさんが通帳とハンコを持って来て、お金の引き下ろしを依頼し、見ていた私をびっくりさせた。

食糧不足を補うため、あちこちの家で鶏を飼っていた。父の友達が、「食え。」と言ってくれた若鶏は、若沖の画の雄鶏のような見事な鶏冠を持つ成鳥に育ち、ある日、時ならぬ鳴き声をあげた。一個の大きな卵が産み落とされていた。私は掌に仄暖かい卵を載せて、八百屋に出かけた母の許に走った。初めて、

命の温みを肌で感じた出来事だった。

スーパ―等は無く、母親達は籠を下げて、近くの八百屋や魚屋で買物をした。八百屋の店先には、じゃが芋や玉葱の入った木箱が並べられ、後の壁には映画やストリップシヨウのポスターが堂々と貼られていた。

当時の生活圏は狭く、人々の楽しみも地域の中に限られていた。冬の夜には互いの家を訪れて、百人一首に興じる事もあった。子供達は、大人達の暮らしの憂いをよそに、近所の庭先を駆け回り、海に川にと遊び回った。

当時の人間が全て善良という訳ではないが、少なくともプライバシーという鎧に身を固め、予測不能な犯罪に身構える必要はなかった。誰に憚ることなく人に親切を施し、素直に人の親切に感謝できた。

やがて暮らし向きが落ち着くにつれ、苦境の中で身を寄せ合って暮らしていた住民達はそれぞれに暮らしを求めて去って行った。

故郷を離れて数十年。その間海への想いが消えることは無かった。ついには海や川が頻りに夢の中に現れるようになった。そこで、私は姉夫婦の七回忌と先祖の墓参りを機に、自分のルーツ巡りをするを思い立った。

卒業した小中高と見て廻り、思い出の海を臨む川裾の橋に立ち沖合を眺めた。そこにはいつも心に浮かんでいた牧水の「白鳥は哀し

からずや…」の景色―対岸の島を背に鳴きながら高く低く飛び交う鴉の姿―は見えず、遙か沖合に新しい橋が架かっていた。歳月を経て同じ場所に立てた興奮と、現状を受容せざるを得ない軽い胸の痛みを同時に覚えた。

最後に、私は、あの写真の生地、心の中で回帰し続けたその地を訪れた。私の一方的な感傷と危惧しながら、子供の頃によく遊んだという縁を頼りに、四才年下の従甥に六〇年振りに再会した。

それは記憶の中の少年が、突如立派な成人男子として現出した様な、何とも説明し難い感乱と、先に逝った人々の後に一人残された侘しさを慰撫する様な陶酔感をもたらした。

手許には、迎えに来た私の家族と一緒に優しく微笑む一枚の写真が残り、元の海は穏やかに私の心を洗い続けてくれている。

(評)

一枚の古い写真に想起される幼い頃の作者の自我の目覚めの記憶や市営住宅に見る市井のひとびとの人情溢れる暮らしが、感受性豊かな子ども時代の記憶として綴られる。故郷を離れ暮らしていた作者は後年思い出の地に従甥を訪ね、記念に自身の家族と写真を撮る。読後の余韻が心地よい佳品。

思いもよらぬ交流

日夏町
田中恵子

新聞の読者欄に八十四歳の男性の投書が載っていた。

同窓会に出席するため、大阪から京都駅に降り立った彼は、会場への道順が分からなかった。駅付近は日本人より外国人の方が多いようだった。この人は地元の人かとも思っていて、通りすがりの若い女性に道を尋ねると、スマートフォンを取り出して調べて、

「次の角を曲った所ですよ」

と教えてくれ、さらに、

「私は韓国からの旅行者です」

となめらかな日本語で付け加えた。彼は驚いて、とっさに「カムサハムニダ（ありがとうございます）」と言っていると、彼女はにこっと笑顔を見せて去って行ったという。

私にも似た経験がある。

六年前のことだ。尼崎に住む娘と大阪駅で出会って、新歌舞伎座での、ものまねタレント、コロツケさんの公演を観に行くことになっていった。大阪駅で娘と会えさえすれば、

後は娘に付いていけばよい。私には大阪の街などさっぱり分からない。

JRの最寄り駅は河瀬である。駅が混雑していて驚いた。普通電車しか停まらないこの駅は、朝九時台にはいつも乗客はまばらなのである。

下りの電車が動いていなかった。昨日通り過ぎた大型台風のため、どこかに不具合が生じているらしい。駅のアナウンスがたびたび流れて、復旧がいつになるか分からないと詫びていた。下りの電車に乗って、草津で新快速に乗り換え、京都、大阪へと久しぶりの電車旅も楽しみだったのだ。

その日は空一面の青空で、澄んだ空気の中を背筋を伸ばし、めったに穿かないスカート姿で駅まで歩いてきたというのに……。上りの電車は動いていた。右往左往している大勢の人の中から、「新幹線は動いているらしい」という声が聞こえた。新幹線なら米原だ。ここから上りで三つ目の駅。米原駅へ行ってみよう。

米原駅も大混雑で、新幹線の乗り場まで、上の方の表示板を見て矢印どおりに駆けていった。券売機の前で一息。本日指定席・自由席券と表示された券売機は二台あって順番を待った。上下線とも動いていた。

私の番になって画面をタッチした。駅名が

並んだ画面に変わり、大阪を探す。大阪がない。慌てない、慌てないと胸を叩き、目を見

開いて、大阪を探すがやはりないのだ。「大阪、大阪」と、声が出てしまっていたのだろう。左の上の方から男性の声がした。

「失礼ですが、もしかして新大阪ではありませんか？」

「あつ、そうか。大阪には新幹線は停まらないのだ」

知っていた。だが、その時は完全に忘れてしまっていた。それまで新幹線に一人で乗ったことなどなかった。画面に新大阪はあった。タッチした。切符を手にすることができた。

そこで初めて左上を見上げた。

（あつ、外国の人や）

背が飛び切り高く、鼻の高い白人男性の笑顔があった。私はおおっと口を丸くしてしまった。

「あの……ありがとうございます」

「どういたしまして」

何と美しく優しい日本語だろう。

その人はさつと格好良く手を挙げ、広い背中を見せて立ち去っていった。

新幹線と在来線を乗り継いで、大阪駅に無事に着くことができた。娘にも会えた。娘は、「お母さん、なんとかして行こうと、自分で考えて行動できたね」

と誉めてくれた。

公演にも充分間に合った。コロッケさんの舞台上で大興奮し、楽しい時間を過ごした。帰りの在来線はまだ乱れてはいたが、上下線とも動いていて、無事に河瀬駅に降り立つことができた。

ところで、例の投書の男性は、

「世間では観光公害と呼んで、マイナス面ばかりが指摘されがちだが、外国人観光客との思いもよらぬ交流ができてうれしかった」と結んでいた。

八十四歳の彼は立派である。韓国語でお礼を言った。

私もあの時、

「サンキューベリマッチ」

と言えばよかった。そのぐらいなら言えないこともなかったのに……。

あの日の外国人との思いもよらぬ交流は、私の嬉しい思い出として忘れられない。

(評)

大阪で娘と落ち合う日に琵琶湖線が運休してしまい急遽米原からの新幹線に変更したときの顛末を、新聞の読者投稿と重ねて綴るユーモラスな作品。オーバートリズムによるトラブルが取り沙汰される昨今であるが、思いがけず外国人との穏やかな交流を得たときの心の温かさが伝わる佳品。

佳作

花と蝶

大藪町
脇坂修身

佳作

一刻者の父の思い

大藪町
吉田和治

佳作

おしどり夫婦

高宮町
伏木いろは

《総評》

良い随筆を書くには「自分にしか書けないことを誰にでも理解できる文章で書く」ことが大切だといわれます。とくに今年度は、この根本を踏まえた完成度の高い作品が多く寄せられたように思います。どの作品も文章に気負いがなく、生活者としての素直な(かつ文芸的な)視点で日常が描かれていることに感銘を受けました。またそれぞれ深いテーマと作者の個性が感じられ審査はたいへん難航しました。そのなかでも上位入賞作品は選者の意見が一致していたこと、惜しくも選にもれた作品も例年ならば入賞していたレベルであり、僅差での結果であったことを申し添えておきたいと思えます。小説は創作された疑似世界を描き、随筆は身近な現実世界に筆を下ろします。そこに作者の個性として表れる文章の密度や速度、展開法のさらなる習得には、ご自身が憧れる作家やお手本としたい随筆やエッセイをいちど丸写ししてみるのもよい勉強となるでしょう。

山口 一